

戦争と音楽

朝ドラ「エール」をみておもったこと

現在放映中のNHK朝ドラ「エール」。たくさんの方がご覧になっていることと思います。私も大好きで、欠かさずみています。9月中旬から10月末にかけての放映内容は、日本が侵略戦争に突き進み、敗戦を迎えるまででした。音楽が戦争にどのように利用されたのか、よくわかる内容だったと思います。(文責：鈴木一彦)

音楽の力

「音楽の力」は、たしかにあると思います。つらいとき、苦しいときになくさめられ、勇気づけられる曲。嬉しいときに思わず口ずさみたくなる曲。音楽は、他の芸術と同様、人間が生きていく上で欠かせないものといえます。

同時に、たいへん危険な一面をもちあわせています。それは、「権力」が音楽を利用したときです。

ナチスと音楽

音楽を徹底的に政治利用したのがヒトラー。ナチスでした。晩年にユダヤ批判をしていたワグナーや、ドイツ人であるベートーベンやバッハらの音楽が「ドイツ音楽」として評価され、マラーやメンデルスゾーンら

ユダヤ系作曲家の作品は「退廃音楽」とされました。

ユダヤ系の演奏家も排除され、多くがアメリカ等へ亡命。ドイツにとどまり演奏を続けたフルトヴェングラー、カラヤンらは戦後、本人の意思がどうであつたかにかかわらず、ナチス協力者として裁かれています。

日本軍国主義と音楽

日本の軍部も音楽を積極的に利用したのは、「エール」に描かれている通りです。国民の心を掌握し、戦争へと駆り立てるために、多くの作曲家、作詞家に曲を作らせました。

主人公・古山裕一のモデルである古関裕而の「活躍」はドラマのとおりです。

日本を代表する作曲家・山田耕筰(ドラマでは小山田耕三名で故・志村けんが演じていました)は、

「音楽挺身隊」を結成し、自ら隊長に。「三國旗かざして(日独伊同盟の歌)」「アツツ島血戦勇士顕彰国民歌」ほか数多くの戦時歌謡を作曲しています。その他古賀政男、服部良一ら、戦後も活躍した著名な作曲家がおびただしい数の戦時歌謡、軍歌を作曲しています。

作詞家(詩人)では、「エール」の村野鉄男のモデルとされている野村俊夫をはじめ、北原白秋、サトウハチロー、高村光太郎らが戦争協力詩を作り、軍歌を作詞しました。

白秋には「万歳ヒトラー・ユーゲント」という題名の作品もあります。彼らがつくった軍歌によって当時の若者たちは戦地に送られ、あるいは自ら軍隊に入隊し、多くは命を失ったのでした。

音楽家の戦争責任

ドラマの中で裕一は、終戦直後、自分が作った音楽によって多くの若者が死んでいったことに悩み、胸を痛めていました。古関裕而本人が反省

していかどうかは私にはわかりません。ただ、前述した山田耕筰をはじめ、戦争に協力した多くの作曲家、作詞家(詩人)が戦後も「大活躍」していたところを見ると、あまり「反省」はしていません。

「翼賛」に抗った芸術家

音楽家から幅を広げると、当時においても反戦を貫いた人は確かにいます。小説家の小林多喜二はあまりにも有名です。

作曲家では、プロレタリア音楽同盟に参加していた吉田隆子がいいます(私は彼女の作品を知りません)。

また、「ぞうさん」や「やぎさんゆうびん」などの童謡詩で有名な詩人のまどみちおは、戦後50年後に出版した全集に、戦時

中に作った戦争協力詩もあえて収め、あとがきですべてを謝罪の言葉としています。高村光太郎も戦後の自らの生き方で戦争協力への反省を示しています。

私は、個人的に軍歌や軍唱歌謡はどうしても好きになれません。一方で、たくさん軍歌を作曲した古関裕而の「長崎の鐘」や「栄冠は君に輝く」は大好きです。また、ヒトラーが好んだワグナーの楽曲も好きです。つまり、音楽そのものに罪はなく、どのような音楽を好むかは個人の内心の自由であると考えます(そういう意味で「国家斉唱の強制」は許されない)。罪があるのは音楽を自分たちの都合の良いように利用する権力者であり、それを無批判に協力し反省もしない音楽家ではないでしょうか。音楽が戦争に利用される暗黒の時代が二度と来ないよう注視していかねばなりません。